読　後　感

谷　口　　茂
（昭和 36 年修士修了）

この4月下旬に開かれた創刊号の合評会に，発題者として指名されるという栄誉に浴しながら，思わぬ入院騒ぎで失礼してしまった。その折病院のベッド上で唧った腹ふくるる心地を，この誌面

上で晴らすことをお許しいただきたい。

とにかく全部に目を通した。それも義理からではなく，興味に駆られて。嘲風会が単なる親睦会的な同窓会ではなく，その負える名にふさわしく学術的なものになって欲しいと長年願ってきた一人として，この発刊を無条件に慶賀する気持があったのは事実だが，もちろんそれだけではこれ程のものを読み通すのは難しい。構成上のさまざまの工夫，読物としてのバランスの考慮，そして何よりも内容の充実のための努力……創刊号にしてはと言うべきか，それともだからこそと言うべきか，ともあれかなりの出来映えだと思う。そこでできるなら網羅的に言及したいところだが，枚数に限りがあるので，残念ながら書評や紹介その他は割愛して，論文についてだけ簡単に感想を述べることにしたい。

金井氏の論文には氏の研究の進展のプロセスが簡潔に記述されており，小生はさながら自分でも勉強を深めているような感じを受け，金井氏の教師的才能にいたく感心した。これは冗談ではなくて，いわゆるウェーバー信徒の文章に何回ウンザリさせられたか分からない体験からの率直な感想である。東大宗教学科に，もし学統のようなものがありうるとしたら，少なくともその一つは明晰な文章，少なくとも本人がよく分かっている文章ということであろうし，是非そうあって欲しいと思う。その意味もあって，小生はこの論文を，西洋における資本主義の形成という歴史的事実の社会学的解明への一つの試みであったものが，決定論化されたことへの原理的批判として読んだ。ウェーバーの理論そのものに関しては，〝「特殊な観点」の一面性とそれゆえの誇張とが見られる〟のは事実だが，それはパイオニア的業績に必然的に伴う諸欠陥ではなかろうか。小生は，そういったものの存在が，かえって信憑性を高めていると考えているが，これはあまりにも反語的にすぎるだろうか？

高島氏のものは，本人も自覚しているように，論文というよりは，そのための基礎資料の一部の紹介である。しかし小生は，この数年密教に興味を引かれているので，それとの関連で面白く読んだ。それだけではなく，このカシミール・シヴァ派のさまざまな儀礼のなかに，カトリックのサクラメントや日本の民間信仰的な死者供養と類似のものが数多くあることを教えられて，今更ながら人間の本性というものに対して，懐しいようなうとましいような複雑な感慨を覚えたことであった。これらの研究作業が積み重なって，近い将来に大著となることを心から期待したい。

鶴岡氏と長井さんの論文は，その性格づけが難しい。いわゆる経験科学としての宗教学のなかに位置づけるのは，ちょっと無理だ。むしろ文学研究のジャンルに属すると考えた方がすっきりする。むろん宗教現象は無限に多様な形式で展開しているので，このような論文を広義の宗教学的研究と見なすことに，小生はさして支障を感じない。しかし文学的研究ということにもいろいろ問題があって，何でも構わないというわけにもいかない。というのは，文学的研究は作品への感動から始まるのだが，この感動というものは，それ自体言語を絶した，いわば一種の神秘体験であるから，これの文章表現は，よっぽど自覚的になされないと，折角のすぐれた読解力が死んでしまうこともあるからだ。表現を客観的なものにするためのいろいろな枠組みがある。自分の貧しい経験を語らせてもらうなら，小生は伝記的アプローチで客観化を計った。御両所の深い味読をより一層生かすために，自分の研究方法や目的をいま一度明確化し，宗教学的研究のなかに位置づける作業を，と小生は切にお勧めしたい。それは，そこからハミだすために不可欠な前提であるゆえに。

堀氏の論文は，長年手がけている東海地方の漁村の船霊信仰の，主として現状の調査に基づくものである。小生は南九州の漁村に近い田舎町に育ち，よく浜に遊びに行って地曳き網の綱を引くのを手伝って，小魚をもらって大喜びした思い出があるので，論文を読みながら漁村の生活が眼前に彷彿するのを覚えた。それはともかく，日本人の宗教意識の原初形態の，いわば生きた化石のような船霊信仰も，都市化の波に遠からず押し流されてしまうのは目に見えているだけに，その学術的調査は緊急の課題である。また「まえがき」によ

れば，この研究は，東海地方の産霊神体系についての，堀氏の調査研究構想の一環として行われている由。是非ともこの壮大な計画が実現することを期待したい。

以上，妄言多謝。